

# 第 168 回東邦医学会例会 予稿集

令和 8 年 6 月 15 日(月)

## A. 研修医発表

### 1. 皮膚所見の鑑別に難渋した一例

田中 友 (研修医)

指導：佐藤 高広 (総合診療・急病センター (感染症科))

25歳男性。発熱と多発性広範を主訴に受診。蜂窩織炎疑いに対して抗菌薬治療開始するも症状改善なく、血液培養陰性であった。皮膚生検にて血管炎所見認め、口腔内アフタ、HLA-B51陽性からベーチェット病が疑われた。急性発症やステロイド反応性などから sweet 病も鑑別に挙げられたが、血管炎所見を認めたことから非典型的と考えた。以上よりベーチェット病が強く疑われる症例であった。

### 2. 巨赤芽球性貧血に伴う pseudo-TTP を来した外国人渡航者の一例

菊池 桂史 (研修医)

指導：小松 史哉 (総合診療・急病センター (内科))

赤血球破碎を伴う溶血性貧血で最も初めに疑われるのは血小板減少性紫斑病であるが、ビタミン B12 欠乏による巨赤芽球性貧血でも赤血球破碎を伴う場合が報告されており、pseudo-TTP と呼称される。今回は母国での医療機関受診歴がなく、既往歴などの患者背景が不明なことから診断に難渋した外国人渡航者の pseudo-TTP を経験したため、他科と協同した診断・治療プロセスについて報告する。

### 3. 全身性の多関節炎を生じた痛風性関節炎の一例

青柳 光紀 (研修医)

指導：繁田 知之 (総合診療・急病センター (内科))

アルコール多飲とプリン体摂取を背景に急性発症の全身性多関節炎を呈した中年男性。炎症反応高値と高尿酸血症を認め、痛風発作の既往もあることから、痛風性関節炎として NSAIDs、コルヒチン、ステロイドを併用し加療を行った。入院 10 日程度で関節炎は消退し、尿酸降下薬を導入した上で退院となった。そして、痛風の疫学や生理、薬物治療の文献検索をもとに本症例を振り返り、適正な薬剤選択や再発予防について考察する。

### 4. 尿中ケトン体陰性、血糖高値であったがアルコール性ケトアシドーシスと診断した症例

高田 英幸 (研修医)

指導：山田 篤史 (総合診療・急病センター (内科))

今回尿ケトン体陰性、高血糖であるにも関わらず、アルコール性ケトアシドーシスと診断した症例を経験した。尿ケトン体陰性であってもケトアシドーシスを否定することはできないため、血中ケトン体を測定することがある。血糖高値など非特異的な所見を示すことがあり、現病歴など総合的に診断する必要がある。

## B. プロジェクト研究報告

### 5. 鼻茸を伴う慢性鼻副鼻腔炎患者における組織常在型メモリーB細胞の検討

井上 なつき（東邦大学耳鼻咽喉科学講座（大橋））

慢性鼻副鼻腔炎の病態は複雑であり、機序の一つとして免疫系の関与が指摘されている。われわれは、過去にまだ報告がない、正常鼻副鼻腔粘膜および鼻茸を伴う慢性鼻副鼻腔炎における組織常在型メモリーB細胞（BRM細胞）を同定し解析した。BRM細胞は両者に存在し、鼻茸で有意に増加していた。ヒト肺BRM細胞と鼻茸BRM細胞は、表面マーカーが類似していた。鼻茸BRM細胞が病態の形成に関与する可能性が示唆された。

### 6. 胎児アシデミア予測のための分娩中の胎児ストレスの蓄積を考慮した新規AIモデルの確立

神谷 美緒（産婦人科）

胎児心拍数陣痛図は脳性麻痺や胎児アシデミアの予測において高い偽陽性率が指摘されており、周産期領域の大きな課題となっている。この課題に対し、我々は先行研究で分娩中の胎児のストレスの蓄積を評価し胎児アシデミアを予測するiPREFACE scoreを考案しその有用性を報告した。本研究ではこの「胎児のストレスは蓄積する」という概念を用いて、胎児アシデミアを予測する全く新しいAI予測モデルを確立することを目的とした。

### 7. メチシリン感性黄色ブドウ球菌血流感染症の分子疫学的解析と院内伝播に関する検討

佐藤 高広（総合診療・救急医学講座）

2020年に当院血液培養から分離されたMSSA 25株を対象に、SNP解析による院内感染クラスターの検出を試みた。7つのSequence Typeに分類し、ST別リファレンスゲノムを用いてsnippy (ver.4.6.0)によるSNP距離行列を算出した。ST15の3株においてSNP距離0（同一クローン）を確認し、疫学情報との照合から同一病棟での伝播が示唆された。他の6STではクラスターを認めなかった。WGSによるルーチンモニタリングはMSSAのサイレントトランスミッション検出に有用であることが示された。

### 8. 心臓血管外科の周術期血糖管理に関するランダム化比較試験

田淵 千陽（佐倉病院外科）

周術期血糖管理は術後合併症予防に重要であるが、Sliding Scale法では血糖変動が大きく管理精度が十分とは言えず、頻回の介入を要する。本研究では心臓血管外科手術症例を対象に、人工膵臓を用いた周術期血糖管理が術後合併症および臨床経過に及ぼす影響と安全性について検討したので報告する。

C. 柳瀬武司奨学基金受賞講演

9. **心筋酸素需要に応じた腎性貧血診療の確立**

中田 憲司（東邦大学腎臓学講座(大橋)）

慢性腎臓病患者における心筋酸素供給(Hb 値)と需要(RatePressureProduct;RPP)の不均衡と心筋障害(MI)の関連を検討した。血液透析患者 283 例を対象とした後ろ向き横断面研究で、高 RPP かつ低 Hb を不均衡と定義した。心筋トロポニン T $\geq$ 0.15ng/mL を MI とすると、不均衡群で MI のオッズ比は有意に上昇した。Hb および血圧・脈拍管理が心筋障害予防に重要であると考えられた。

D. 大学院生研究発表

10. **自己免疫疾患モデルマウス (SATB1cKO マウス) における病原性 T 細胞の解析**

眞下 修平（生体応答系皮膚科学）

指導教授：種瀬 啓士（皮膚科学講座）

血球細胞特異的に SATB1 を欠損させた SATB1 cKO マウスは、生後 4 週よりシェーグレン病様の自己免疫疾患症状を呈する。発症時期の唾液腺には CD4・CD8 共陽性 (DP) T 細胞の浸潤が認められることから、病態形成への DPT 細胞の関与が示唆される。そこで、DPT 細胞による病態機序解明を目的として、DPT 細胞のハイブリドーマを樹立し、これら細胞の T 細胞受容体特性や自己反応性などを解析した。

11. **関節リウマチ患者における併存症の蓄積に関連する因子の検討**

入田 泉（生体応答系膠原病内科学）

指導教授：南木 敏宏（内科学講座膠原病内科学分野）

883 人の関節リウマチ (RA) 患者を対象に、診療上重要と考えられた併存症として、呼吸器疾患、心疾患、筋骨格疾患、悪性腫瘍、感染症などにつき 44 項目をカウントし、併存症の数をスコアとし、スコアの増加に関連する因子を前向きに横断的に検討した。多変量解析により併存症の増加に関連する因子は年齢、グルココルチコイドの使用、身体機能低下であった。また、筋骨格疾患の増加とその他の併存症の増加が関連した。

E. 分科会報告

12. **[東邦大学医療センター大橋病院外科集談会]  
穿孔性腹膜炎を発症した終末回腸仮性憩室穿孔の一例**

東 鷹佑（東邦大学医療センター大橋病院外科）

小腸憩室は比較的稀で多くは無症状で経過する。多くは空腸に発生し終末回腸穿孔は稀である。今回、穿孔性腹膜炎を発症した終末回腸仮性憩室穿孔の一例を経験した。症例は 67 歳男性。腹痛で受診し造影 CT で回腸憩室の壁破綻と周囲の液体貯留を認めた。終末回腸憩室穿孔と診断し緊急手術を施行し回盲部切除を行った。本症は術前診断困難とされるが急性腹症の鑑別として留意すべきである。

## F. 研修医発表

### 13. 長期入院中に水痘を発症した一例

佐藤 美有 (研修医)

指導：小松 史哉、鈴木 美音 (総合診療・急病センター (内科))、眞部 睦紀 (循環器内科)

長期入院中の 57 歳女性。第 50 病日に発熱と播種性紅斑を呈し、第 51 病日に紅斑の水疱化と一部痂皮化を認め、抗原検査と皮疹の分布より水痘と診断された。アシクロビル点滴投与開始後に速やかに解熱し経過良好であったため第 64 病日に退院となった。本症例は院内感染が疑われ、医療従事者を介した伝播や軽症水痘による空気感染が関与した可能性がある。さらに院内感染対策や重症化予防としてワクチン接種の重要性が示唆された。

### 14. 透析患者の化膿性脊椎炎治療中に非閉塞性腸管虚血を発症した 1 例

秋山 裕香 (研修医)

指導：小松 史哉 (総合診療・急病センター (内科))

症例は透析導入されている 81 歳女性。発熱を主訴に救急要請され各種検査の結果、化膿性脊椎炎と診断し抗生剤にて治療を開始した。しかし第 15 病日に突然の腹部全体の圧痛を訴え腹部 CT の所見より非閉塞性腸管虚血 (non-occlusive mesenteric ischemia: NOMI) の診断、数日後に死亡となった。NOMI は器質的な血管閉塞が存在しないにもかかわらず腸管虚血を起こす疾患である。特に透析患者ではリスクが高いとされており、本症例を通じて診断の難しさやリスクの高さを痛感した。

### 15. 失神を主訴に来院した SLE の一例

清水 俊希 (研修医)

指導：小松 史哉 (総合診療・急病センター (内科))

失神が主訴の 66 歳女性が SLE の診断に至った一例である。当初は薬剤性失神や尿路感染症を疑うも失神の原因は不明で、抗菌薬加療開始後も発熱が遷延した。経過中に血球減少、肝機能障害、フェリチン高値を認め、その後顔面紅斑が出現、抗 dsDNA 抗体陽性、補体低下から SLE の診断に至り、ステロイド治療開始により軽快した。高齢発症の SLE は非特異的な症状が現れる場合があり、本症例も診断に難渋した一例であった。

令和8年6月16日(火)

I. 大学院生研究発表

18. [プロジェクト研究報告を兼ねた講演]  
**環境からのファージ分離とファージセラピーの実用化：肺炎桿菌に対する新しいアプローチ**  
(プロジェクト研究採択番号 25-10)  
長島 俊介 (生体応答系 微生物・感染制御学)  
指導教授：原田 壮平 (微生物・感染症学講座感染病態・治療学分野)
- 耐性菌対策が求められる中、抗菌薬に代わる新規治療法としてファージ療法が注目されている。*Klebsiella spp.*でも耐性化が問題であるが基盤整備は十分でない。今回、下水より *Klebsiella spp.*に対するバクテリオファージ5種を新規分離した。形態観察、全ゲノム解析および保存株による感染域評価で各ファージを評価し、DefenseFinder で宿主防御系を解析し感受性との関連を検討した。
19. **低年齢児における Spot Vision Screener の屈折異常判定基準値の検討**  
安齋 葉月 (高次機能制御系眼科学)  
指導教授：堀 裕一 (眼科学講座)
- Spot Vision Screener (以下: SVS) は乳幼児の健診用検査機器として普及している視覚スクリーニング機器である。3歳以下におけるSVSの屈折異常判定の精度について検討した。SVS設定基準値を用いた判定精度は感度84.1%・特異度84.1%、日本弱視斜視学会・日本小児眼科学会推奨基準値では感度71.0%・特異度93.9%であり、3歳以下においてSVSを用いた屈折異常判定は有用であった。
20. **患者血漿を用いた MRSA-plasma-BF 形成能評価と臨床背景の検討**  
柏木 克仁 (生体応答系微生物・感染制御学)  
指導教授：原田 壮平 (微生物・感染症学講座感染病態・治療学分野)
- MRSA 血流感染症の重症化にはバイオフィーム (BF) が関与するとされるが、生体内での形成機序は不明な点が多い。今回73人の患者血漿を用いてBF形成能と背景因子を評価した。患者血漿BFは剥離しやすく形成量は患者ごとに異なり、顆粒形成の有無で2群に分類された。共焦点顕微鏡では構造差を認めたが、背景因子に差はなかった。
21. **緑内障患者における緑内障点眼薬とマイボーム腺機能の関係**  
藤田 智子 (高次機能制御系眼科学)  
指導教授：堀 裕一 (眼科学講座)
- 緑内障点眼薬の長期・多剤使用が前眼部に及ぼす影響を検討するため、患者42例(84眼)を対象に調査を実施した。その結果、多くの症例で中等度以上のマイボーム腺欠損が認められた。特に、3種類以上の点眼薬を併用している群や、プロスタノイドFP受容体作動薬の使用群において、マイボーム腺機能不全(MGD)の重症化が強く示唆された。

J. 医学研究科推進研究報告

22. **前庭障害・加齢による平衡障害・転倒傾向をきたす身体動揺の解析と補装具および電気刺激を用いた姿勢制御システムの構築 —第1報—**

牛尾 宗貴（佐倉病院耳鼻咽喉科）

めまい平衡障害は生活の質を低下させ転倒のリスクを高める。第1報では、開眼時と閉眼時の身体動揺について、重心動揺計と3Dモーションキャプチャーを使用して解析した結果を提示する。開閉眼いずれにおいても重心動揺と強く相関しているのは腰部の動作であった。また、閉眼により左右方向の身体動揺が大きくなるが、前後方向の身体動揺は大きくならないことが明らかになり、姿勢制御システム構築のための基礎データとなった。

L. 医学研究科推進研究報告

24. **スリーブ状胃切除術術前のIQテストと体重および手術後の体重減少との関連**

大平 征宏（東邦大学医療センター大橋病院 糖尿病・代謝・内分泌内科）

BMI 35kg/m<sup>2</sup>以上の高度肥満患者に対し、減量目的に胃を切除するスリーブ状胃切除術が行われている。演者および佐倉病院代謝センターはこれまでに術後の体重減少に関わる因子を検討し、その身体的な特徴について報告している。手術の対象になる肥満患者には精神疾患を合併している例が多く、メンタル面の特徴についても検討する必要がある。今回、術前のIQテストと術後体重減少との関連について検討したため報告する。

令和8年6月17日(水)

M. 一般演題

25. **膝関節内視鏡術後下肢複合性局所疼痛症候群の一例**

岩本 津和（東邦大学医療センター大森病院麻酔科）

低侵襲手術である膝関節内視鏡手術において術後痛から難治性疼痛を発症した一症例を経験した。患者は内視鏡下半月板形成縫合術後6ヶ月後に当科ペインクリニックを受診した。腰部硬膜外ブロック・坐骨神経ブロックが施行されたが効果に乏しかった。脊髄くも膜下麻酔が無効であった為神経障害性疼痛の複合性局所疼痛症候群と診断されケタミン持続点滴と脊髄刺激療法が開始された。手術から28週後、疼痛緩和され杖歩行可能となった。

26. **栄養障害型表皮水疱症の全身麻酔下抜歯術における気道管理**

岩本 津和（東邦大学医療センター大森病院麻酔科）

栄養障害型表皮水疱症はVII型コラーゲン異常により皮膚・粘膜が軽微な摩擦で水疱を生じる疾患で、喉頭鏡やマスク操作による気道損傷・閉塞を避ける工夫が必要である。開口1cmの13歳男児の抜歯術において、経鼻的に咽頭留置した小径気管チューブでCPAPを施行しマスク換気なしに十分な酸素化を行った後筋弛緩薬を投与し、反対側鼻腔からの経鼻ファイバー挿管に単回で成功した。SpO<sub>2</sub>は終始100%を維持し気道水疱も認めなかった。

N. 大学院生研究発表

27. 若年メンタルヘルス不調者におけるうつ症状の回復過程に関連する因子

北野 知地 (社会環境医療系精神神経医学)

指導教授：根本 隆洋 (精神神経医学講座)

メンタルヘルス不調の重症化を防ぐため、その早期の段階から、回復に関わる要因の検討が重要である。今回、メンタルヘルス不調を認めた若年者を対象に、支援を受ける過程の3時点(ベースライン、3、6か月後)で調査を行った。ベースライン時点で家族関係が良好な群ではうつ症状の有意な縦断的改善を認めたが、不良な群では改善を認めなかった。家族関係は予後予測因子であると同時に、重要な介入対象となることが示唆された。

28. Iodine K-edge-enhanced and high-energy imaging using a high-spatial-resolution dual-energy photon-counting x-ray computed tomography scanner

佐藤 二郎 (代謝機能制御系臨床腫瘍学)

指導教授：渡邊 学 (臨床腫瘍学講座)

CdTe フラットパネル検出器を用いた高空間分解能デュアルエネルギーPCCT装置を構築し、ヨードK-edge強調CTおよび高エネルギーCTを施行した。イヌ心臓ファントムにおいて、K-edge CTでは微小冠動脈が高コントラストに描出され、高エネルギーCTでは金属アーチファクトの低減が確認された。

O. 柳瀬武司奨学基金受賞講演

29. 妊娠初期における両親の新型タバコの喫煙状況と「つわり」との関連

秋山 実季 (社会医学講座衛生学分野)

新型タバコ(加熱式・電子タバコ)の能動および受動喫煙が妊娠に及ぼす影響は明らかでない。本研究では、鎖肛の予防因子探索を目的とした症例対照研究の対照群1,450人を対象とし、両親の喫煙状況と、正常な妊娠経過と考えられている妊娠初期の嘔気・嘔吐(すなわち、つわり)との関連を検討した。母親の新型と紙巻タバコの併用はつわりがないことと関連していた(OR 2.07、95%CI 1.02-4.22)。

P. 分科会報告

30. [第18回 東邦医学会佐倉内科分科会]

大動脈弁狭窄症における心機能および血管弾性能 Cardio Ankle Vascular Index 変動の意義

戸谷 俊介 (東邦大学医療センター佐倉病院内科学講座循環器内科)

大動脈弁狭窄症(AS)の手術を受けた透析患者41例を対象に、Cardio Ankle Vascular Index(CAVI)の経時的変化とAS進行の関連を後方視的に解析した。ASが重症化する2年前からCAVIは有意に低下を示し、 $\Delta$ CAVIはmeanPG上昇と有意に関連。ロジスティック回帰分析でも $\Delta$ CAVIは独立した予測因子であり、CAVIはAS進行を早期に捉える補助的マーカーとなる可能性が示された。

## R. 研修医発表

### 32. 原発開放隅角緑内障に対し Hydrus を施行した 1 例

大塚 梨紗 (研修医)  
指導：小松 哲也 (眼科)

原発開放隅角緑内障に対し白内障手術と Hydrus 併用手術を施行した。症例は 80 歳男性、術前は点眼加療により眼圧は右 11mmHg、左 10mmHg でコントロールされていた。術後は両眼とも点眼なしで経過し、術前同等の眼圧を維持した。Hydrus は線維柱帯を構造的に支持する新規デバイスであり、眼圧管理と点眼負担軽減への有用性が示唆された。

### 33. 重症化した腸チフス菌血症の一例

高本 さくら (研修医)  
指導：鈴木 美音 (総合診療・急病センター (内科))

25 歳女性。インドネシア渡航後に発熱、腹痛、下痢が出現。前医で CMZ が開始されたが、敗血症性ショックを呈し当院へ転院。血液培養から *Salmonella Typhi* が同定された。MEPM 投与により改善し、感受性結果に基づき CTRX へ変更。発熱遷延のため造影 CT を施行し脾梗塞を認めた。解熱まで経口抗菌薬を継続し退院となった。腸チフスは熱帯渡航歴のある発熱患者で重要な鑑別であり、重症例の治療期間について文献的考察を加え報告する。

### 34. 背部痛を契機に発見された骨破壊を伴う ALL の一例

風本 陽介 (研修医)  
指導：森 岳雄, 中瀬 大 (総合診療・急病センター (感染症科))

背部痛を契機に発見された骨破壊を伴う急性リンパ性白血病の一例を報告する。症例は 17 歳男性で、亜急性に持続する背部痛と夜間痛を主訴に受診した。高 Ca 血症、腎障害、貧血、溶骨性病変を認めたが、末梢血芽球は陰性であった。骨髄生検にて急性リンパ性白血病と診断した。筋骨格系症状主体の症例では非典型的所見を呈することがあり、診断遅延となる可能性があるため、Red Flag を伴う背部痛では悪性疾患を含めた精査が重要である。